



美術

「石田徹也」悲しみのキャンバス」展

この時代を生きる苦難。「石田徹也——悲しみのキャンバス」展を巡ると、そうした感覚の発生源が、ウィルスのように自らの体と

ここに移り住み、じわじわと増殖してくるという錯覚にとらわれる。

石田は1973年、静岡県焼津市生まれ。96年に武蔵野美術大を卒業

し制作を続けたが、05年に踏切事故のため31歳で亡くなった。昨年、画集が出版され、遺作展やテレビ放送が重なり、広く知られるようになった。今展は小学生時代のポスターから始まり、95年以後の絵画を中心に未発表作品・資料を含む約150点で足跡をたどる大規模追悼展だ。

大半の作品にうつろな目の男が登場する。一種の自画像で、その体は、飛行機と合体したり、顕微鏡に溶け込んだり、クローン人間よろしく複数のネクタイをしめたサラリーマン姿に化けたり、学校、病院、コンビニの中に置かれたりもする。居室でぼつねんと座る姿もある。寂しく、悲しい、不気味な光景だ。そこにあるものは大量消費社会の画一化された個の、孤独、不安だろう。例えば「回収」(98年)は写真上。喪服の家族が囲む棺おけは、電気製品、用の箱だ。遺体の顔、胴体、手が分断されて格納されている。死までもが(それまでの生はもちろん)、管理された表象と映る。閉塞感漫う時代の疎外感が全作通

底しているのだが、微妙な深化も認められる。「無題」(04年ごろ)は同下は、背を向けて横たわる男女を描く。2人のいるベッドは、台風かなにかで破壊され、水浸しになっている街の風景に変容しており、能面のような顔が数面浮かぶ。構造は複雑化し、主題は多義性を持つ。作者は、01年に「2年位前から、意味をやめてイメージで描いている」という言葉を残している。その意識変化が反映していることだろう。

その道半ばの早世を惜しむ。彼の自画像、つまり無言の抑圧でアイデンティティーを失われた存在は、私たちの姿でもある、と共感するからだ。(編集委員・田中三蔵)

いまを生きる苦難 映し出す

2007年(平成19年)

8月8日

水曜日

夕刊

be evening
水曜アート



朝日新聞東京本社

発行所：〒104-8011 東京都中央区
築地5-3-2 電話：03-3545-0131
www.asahi.com